

小金井雑学大学

だより

第13号

平成12年9月28日

雑学大学のテーマについて

雑学大学の運営に関わるようになって、普段から知らず知らず講義のテーマを考えている自分に最近気づきます。

先日、三年振りに新幹線に乗り関西方面に出かけ、用事の合間に各地の、新しいものを駆け足で見てきました。

大阪では、阪急が梅田（大阪駅周辺）に建設した大観覧車。その観覧車はビルの七階にあります。最高点は百メートルを越え、大阪の夜景を満喫することができました。若いカップルがいっぱい、多分近い将来渋谷や新宿あたりに同じようなものができる、との予感を強く持ちました。

次に京都の駅ビルです。工事中は、その図体の大きさに度胆を抜かれました。デパートにホテルとは聞いていましたが、果たして京都であれだけのビルを満杯にする需要があるのかと、いつも疑問を持っていました。しかし、今回初

めて行ってみて見事に謎が解けました。なんと、内側は『がらんど』だったのです。駅の改札口を出ると巨大な屋根付き空間が広がっており、十階の高さにある広場まで六つのエスカレーターが連なっていました。中程には大きな階段もあり、一種の遊園地のような感じでした。ホテルやデパートそれに飲食店等は、大空間を構成する壁の部分に収まっている格好です。実質的には異常に大きい建物ではなかったのだ。『種証』を見た達成感とともに、京都駅を後にしました。

三番目は、名古屋のセントラルタワーです。JR東海が、駅の東側を再開発し、オフィス、ホテル、デパートを一体化したビルを建てたのです。かなり遠くの車窓から名古屋の上空に二本の白い塔が浮かんでいるのが見えました。実際に入ってみると、やはり大きな建物でした。十八階あたりまではふつうの直方体のビルで、十

一階まではデパート、その上は食堂街等になっています。そして、その上に五十一階建のオフィス棟と五十二階建のホテル棟が夫々そびえているのです。

日曜日とあって、オフィス棟最上階にある展望台（パノラマハウス）も食堂街もかなりの人出でした。一見高級そうな店の前にも行列ができていました。新しい盛り場として、冠婚葬祭以外は質素に暮らしているといわれる名古屋人からも、お金を吸い上げ始めているようです。

わずか一日半の旅行でしたが、大阪・京都・名古屋の変化する姿をかいま見ることができました。共通して言えることは、いずれも鉄道会社の事業で、都市空間が交通の要所で縦方向に膨らみ（高層化し）、娯楽的要素も取り入れた上で、集客力を強めている点です。実際に行ってみると、確かに新しい。しかし、こうしたことが、人々の生活にどのような影響を与えるのか、一度、小金井雑学大学で採りあげてもいい。興味あるテーマ、であると思いました。

（天野記）

第四十八回講義 四月十六日

『葬儀の話あれこれ』

教授 秋田林西氏

葬儀というと、いざとなると慌てるものである。実際にどうしたらいいかという疑問に応える形で講義を進めたい。

昔は、寺と近所で道具を借りてきて葬儀を出したのだが、今はだいたい葬儀屋に任せることが多い。宗教の違いや、同じ宗派でもお寺によってやり方が違ったり、全部正確に知ることは、葬儀屋でも難しい。マニュアルがないのである。さらに、最近は葬儀が多様化しており、特に無宗教で、音楽葬やお別れの会などを行う例が出てきた。

ただ、音楽葬やお別れの会は、実際に行なってみると、間がもてないような感じになり、なかなか難しいものである。献花は日本式のようにあるが、その場合は菊の花かバラの花で行なう。変わった例としては、亡くなった方の前で食事会という例もあった。

さらに、散骨という方法もあるが、一度焼いた骨は土には戻らな

い。また骨を撒く場所というのは、いずれ誰かの所有地になるので、どこに撒いても良いということではない。その辺の事情は時代によって変わるので、葬儀屋に相談するのが一番良い。

いずれにしろ、自分でやりたい葬儀の仕方がある時は、残された方の意志もあるので、書面で残すようにした方がよい。

葬儀の価格については、ピンからキリまであり、出す方の価値観で違ってくる。一般的には、東京でも都区内と多摩地域では差があり、多摩地域でも立川より西では差があるようだ。葬儀よりも接待に費用がかかることが多く、最近は見積りをきちんと取る場合が増えており、良いことである。

また、病院で亡くなった場合、病院が提携している葬儀屋はあるが、自分で決めている葬儀屋がある場合は、断ることができるので、事前に相談をしておくのも賢い方法である。

無宗教で、という方法が増えていくようではあるが、宗教の存在という側面もある。人生のけじめとして宗教での葬儀を勧めたい。

第四十九回講義 五月七日

『小金井史跡めぐり』

(玉川上水周辺)』

教授 白井康敬氏

浴恩館・空林荘 浴恩館は昭和三年御大典の祭りに京都で神官の更衣所として使用されたものが、日本青年館に譲渡され、昭和五年にここに移築されたものである。恩に浴するとの意味で「浴恩館」と命名され、昭和六年に全国青年団の幹部養成のために開かれた。

空林荘は、講師の宿舎として利用された。次郎物語の作者で青年教育の実践家としても知られる下村湖人が所長になった昭和八、十二年まで、若者の指導に当たったところである。湖人はここで『次郎物語』の執筆を始め、小説に登場する「友愛塾」と「空林庵」はここがモデルとされている。昭和四十八年に小金井市が買収し、青少年センターとして利用されてきたが、平成三年に閉館、改修の後、新たに「小金井市文化財センター」として開館し、小金井市の歴史と文化財を陳列している。

三光院 臨濟宗泰玄山三光院は

釈迦如来を本尊とし、三光国師を護持する尼寺である。この土地は山岡鉄舟が所有していたといわれ、本堂の庭に鉄舟の碑がある。この精進料理は有名である。

陣屋橋 享保・元文(一七一一一七四一)のころ、南武蔵野新田開発のために立っていた陣屋(役人の駐在所)で、当時は三方に土塁を築き、北側に用水堀があったといわれている。その跡の南側の玉川上水に「陣屋橋」が掛かっている。

玉川上水 江戸の人々の飲料水を確保する為、承応三年(一六五四)に玉川兄弟によって羽村から四ツ谷大木戸まで引かれた(約四八〇)水道水である。天文二年(一七三七)ころに上水堤に桜が植えられ、花見の名所となった。

江戸東京たてももの園 本館は以前の「武蔵野郷土館」で、これは昭和一五年の紀元二六〇〇年の記念式典に使用された光華殿(こうかでん)で、皇居前広場に建てられていたものを昭和十六年に移築したものである。都は、平成五年(一九九三)江戸東京博物館の分館として建設、文化的価値の高い歴史的建造物を保存している。

『原子力の話』

教授 河田 燕氏

原子力というと、かつては鉄腕アトムのような、少年に夢を持たせた時代もあったが、最近の東海村の臨界事故の影響もあって、近年イメージが悪くなっている。

しかし、ただ反対を言うばかりではエネルギー問題は解決しない。エネルギーなしでは社会が成り立たない構造は加速度的に進んでいる。石油や石炭などの資源のない日本は、電気の四〇％を原子力に頼る原子力大国である。世界の中では、アメリカ・フランス・日本・ドイツと並び、日本は世界の十一％を占めている。アジアでは韓国・中国が原子力開発に前向きである。

エネルギー需給の予測を見ると、供給可能なエネルギーを前提としているのではなく、人口増加等の社会要因からエネルギー必要量を割り出し、何とかなるだろうという辻褃合わせで、供給源を期待している感じがする。化石燃料は将来確実に枯渇し、現状でも化

石燃料の消費に伴う地球温暖化の問題があるため、その使用に限界が達している。期待したいのは、太陽エネルギー、風力等であり、その開発が急がれる。核融合の実現は問題山積で、これを将来の予測に折り込むことは危険である。そこで、問題は多いとはいえず、当面の頼りは原子力と言わざるを得ない。

しかし、原子力を支えるウラン資源も意外に早く枯渇する可能性があるため、ウランの有効利用から高速増殖炉が考えられたが、この開発に関しては、安全性の問題や、経済性、政治的な理由から、世界各国は撤退している。原子力の利用には安全面での管理が非常に重要である。しかし、現状は「原子力」という言葉が多くの大学から一掃され、地道な基本技術の積み重ねがなくなりつつあり、安全に関する研究も日陰に追いやられるうとしている。

エネルギーの確保と環境保全と経済成長の三つの調和が崩れた時、人類の文明は奈落の底に突き落とされることになるであろう。

『企業環境管理』

教授 藤森敬三氏

二十世紀は飛躍的に技術が発展した世紀で、豊かで快適な生活を作り出したが、同時に様々な問題―地球資源の無駄づかい、化学物質による汚染、心の荒廃、健康問題―を引き起こした。環境問題というと、一九七〇年代は典型的七公害（大気・水質・騒音・振動・悪臭・地盤沈下・土壌汚染）が主で公害防止法を生み、企業がその原因とされた。一九八〇年代後半から地球環境問題が大きく取り上げられてきた。

一九六〇年に『沈黙の春』でレ・ケルカーソンは科学物質の恐ろしさを訴えた。一九七〇年にローマクラブは、『成長の限界』で経済活動に猛省を促した。一九七二年の国連人間環境会議がストックホルムで開かれたのを皮切りに、世界規模の環境保全活動がスタートした。一九八七年日本で開催された環境と開発に関する会議で、「持続可能性」という概念が打ち出された。この概念は今日の

環境保護運動の基本となった。環境管理の国際規格ISO14001もこの概念から生まれた。経済人会議の要請が発端である。

北欧の環境行政の考え方は単純明快で、「環境方針の第一に「人の健康を守る」をあげていて非常に分かりやすい。誰にでも分かりやすいということが大事なことであり、この方針の元に、PCBの無害化を終えている。日本は長い間PCBの移動を禁止保管を義務づけた結果、すでにかなりの量が粉失したと言われている。またヨーロッパでは廃棄物の質に重点を置くが、日本は量に重点をおいているため、その施策に大きな違いが出ている。日本の企業はヨーロッパの拠点に環境担当者を配置して情報を得、環境対応をしている結果、日本政府より進んだ対策を打っている。環境経営、環境会計ということもすでに言っている。循環社会という時大事なことは、持続可能性を考え、資源生産性の極大化、つまり限られた資源で得られる製品やサービスの機能を最大にする活動をしなければならぬ。単に大量リサイクルをめざす社会ではない。

教授 三上澄氏

橋の基礎的な知識について述べたい。

橋というと、土木の中でも一つの代表的な構造物であり、川や道路のような障害物を越えて渡るためのものである。建築と比べて、近年土木は批判の対象になりやすいが、例えば道路のガードレールのように、車の危険から人命を守る目的のものも多い。ただ、見方によってまた、時代によって考え方が変化し、ガードレールが車のためのものか歩行者のためのものかという見方で、構造が違ってくるのである。昔は土木工学科で学んだが、ここ十年位は環境開発工学というようになった。

土木構造物は公共的な性格を持つもので、建築物とは違いほとんど税金で作られる。納税者として当然発言権があり、関心を持つて見守っていく必要がある。近年、公共事業に対する批判によって、事前の環境への影響調査が義務つけられたのは好ましいこと

で、更に、事後も効果や影響を調査する必要がある。

橋を作るには、総合的な工学の知識が必要である。構造力学であると同時に、交通工学の知識や、地盤との関係では地質・土質の知識も必要、また、材料によつては石や鉄、コンクリートなどの知識も必要になる。規模が大きくなる傾向があり、寿命の長さも求められる。およそ五十年位は持つことが要求されるが、場所によつては交通量の変化で五十年立たないうちかけ替えになることがある。安全性を求められるのはもちろん、現実には経済性も考慮しなくてはいけない。作る時の費用だけでなく、二十〜三十年のメンテナンスも含めての経済性を顧慮することが大事である。

さらに、橋には美観も必要であり、それには周辺の環境との調和も配慮した奥の深さがある。かつて様々な歴史的な役割も担った橋が各地にあり、名前に由来が残されているものは人々の郷愁を誘うものである。

菜修しませんか

教授 高原北雄氏

私は歴史の一年を1mmと距離に換算してきた。即ち東京を現在とすると四十六億年前の地球誕生はカンボジア、生命誕生はベトナムのダナン、古生代は笠岡から、中生代は安城から、新生代は小田原から始まった。このように考え、イメージし難い何億年前の歴史上の事象を地図上にイメージすれば記憶は定着し使い易くなる。日常使い込むにはこのように覚えた感覚量が大切だ。大学生や社会で活躍している技術者や経済人も大小の数字を具体的にイメージしている方は少ないようだ。それは学校で科学という美名の元で単純化・平均化した記号や式を覚えさせ試験が済むと忘れる『我苦愁(我れ苦しみ愁う)』で染脳(洗脳ではない)されてきたことによるようだ。一ワットの仕事率や磁石の強さも実感が湧くように教えられない。これからは音楽やスポーツや料理のように子供時代から業し

く心身に取り込む『菜修』する技術こそ大切と私は考えている。人類誕生以来の4kmは、命がけて家庭や社会から生活技術を心身に修得してきた。一三二mm前の明治には学校教育が始まった。小学校から大学卒業までの十六年間の覚醒時間は約九・四万時間だが、最近の学校の総授業時間数は約一・二万時間と少ない。私達の平均寿命は戦後長くなり、人生八十歳の七〇万時間時代を迎えている。五百時間を一コマの菜修単位とすれば覚醒時間は千コマ分相当になる。私達は生涯菜修時間の使い方で人生を心豊かに、楽しく、感動できるようにする。しかしこの一世紀の間に都市生活者が多くなり、家電製品を三、四十年前から使い始め、共稼ぎの核家庭が増した。親は子供に独房という個室を与えたが、心を通じる日常生活の糧になる文化伝承は激減してきた。そのため親は子供を学校へ丸投げをはじめた。そのため子供達は実体験が少なく擬似体験の多い奇妙な学校教育偏重時代が誕生した。

これからの二十一世紀の社会を健全化するにはどのような術が必要なのだろうか。

『動物保護運動の虚像』

教授 梅崎義人氏

クジラやアザラシやウミガメを救おうという運動が、一九七〇年代から世界中に広がり、全部うまくいって、ワシントン条約で捕鯨禁止になった。野生生物まで食べることはないと主張は多くの共感を得たが、この運動は必ずしも純粹なものではなかった。

例えば、カナダとグリーンランドのイヌイット族が、アザラシの民と言われるほど、アザラシを生活の糧にしていた。食料だけではなく衣服もアザラシから作り、舟もアザラシでといった具合であった。しかし、動物保護運動によって、アザラシはできなくなり、新たな地を与えられたイヌイット族は、生きる目的を見失い、家庭崩壊・若者の自殺という社会問題を抱えるようになった。

オットセイも同じように、一八八八年からアリュート人は猟ができなくなつた。一九一一年には三〇万頭しかいなかったオットセイは、アリュート人がオスを間引い

てオスメスの数を管理すること、二百万頭まで増えていた。しかし、動物保護運動でアリュート人が猟をしなくなつて、オス同士のけんかによつて数は激減、八〇万頭まで減つてしまつた。

クジラも八〇種類のうちの、一〇種類を人間が食料としていた。一九七二年のストックホルムでの第一回国連人間会議でアメリカが商業捕鯨の禁止を勧告、圧倒的多数で通つた。クジラは種類によつては増えているのだが、アメリカは執拗に全面捕鯨禁止を、国際捕鯨委員会で訴えた。捕鯨委員会の中の科学委員会は、アメリカの主張を認めておらず、科学的根拠はない。現在は調査捕鯨をしているが、それも止めるという主張が常にあり、捕鯨とは関係ない国も巻き込んで、政治的に日本を責めてきているのが実態である。

べつこうも象牙も背景は同じである。こうした運動が何故同時発生的に妥協を許さない形で始まつたのか疑問で、二十五年間取材を続けた結果、背景には単純な動物への愛情ではない、白人の人種差別の思想とがあるのではないかと思うに至っている。

『笑いは人生大元気の源』

教授 江見 明夫氏

阪神大震災を体験することになり、不幸のどん底で三つの感動を経験した。第一に見ず知らずの人の親切、第二に皆不幸な中で暴動や略奪がなかつたこと、第三に若者のボランティアであつた。損な経験もあつて、今人間開発道場をやっている。私は、人生三期説（就職期、就実期、就熟期）を唱えており、現在第二期の就実期である。第三期は八十〜百才と考えている。

さて、今自殺者が増えているというが、不景気による働き盛りの男性だけではなく、七十五才を過ぎた方の自殺も増えている。その理由は、生きがいがなくなつていくことによるものである。収入の有無はともかく世の中の役に立つようなこと、周囲の人が評価してくれる仕事を持つことが人間の生きがいにつながる。人は年をとると、脳細胞が減るが、それでも脳細胞全体の二〜三%しか使っていないと言われており、人生に大き

な目的を持ち、プラス思考をすることによつて、脳を活性化させることができる。それは、年齢や性別には関わりがない。

人生の目的は、まずビジョンを持ち、そして実現のための戦略を持ち、戦術を考へるといふように、しっかりとした目標を持つことが成功につながるのである。

そして、意識的に感覚をみかくために、毎日感動することを見つけ、積極的な心構えや好奇心を持ち、楽観的に考へること。

さらに、脳力開発という面では、意識的に『笑い』を取り入れていくことが効果的である。笑いには、脳を活性化し、免疫力を強化し、血液循環を促進し、運動脳力を高めるといふ肉体的効用だけではなく、精神的にも社会的にも高い効用を持っている。そして、トレーニングをすることでつらい時や、起こっている時にも笑いを取り戻すことが出来るようになる。それが結局脳を活性化し、人生を意義あるものにするのである。

10月 1日 「タンブル騎士団の潰滅—フランス王権の伸張の陰に—」

兵頭信彦氏 (元都立西高校長)

10月15日 「ASEAN (東南アジア諸国連合) について」

織田俊男氏 (元日本商工会議所ベトナム委員会副委員長)

11月 5日 「私の見た中国」

吉武百合氏 (中国語通訳)

*⑩工業高校の文化祭のため場所が変更になります。

11月19日 「人と動物との共生」

杉山公宏氏 (獣医学博士、日本獣医畜産大学元教授・学長)

12月 3日 (手話について)

† † † † †

小金井雑学大学サークル「五行歌の会」の紹介

8月20日の第56回講義がきっかけになってサークルができました。

メンバー募集中です。

第1回目の集まりは10月8日(日)午後2時より、本町暫定集会所(シャトービル1F)

五行歌とは—発祥は万葉の歌より古く、そして今次第に参加者が増えているという、最も古く最も新しい歌。年齢・性別関係なく、方言でも標準語でも思ったまま、自分の言葉で表現する歌です。5行で表現するということが約束事です。歌は自分の思いを表現できる手段で、ストレス解消にも効果があります。むずかしいいきまりがないので、はじめての方にも名作を作るチャンスあり。

問い合わせは、半田(☎ [REDACTED])、又は五十嵐まで。

発行責任者 五十嵐京子
小金井市本町

☎ & FAX

(夜間)

編集後記

13号は本当に発行が遅れてしまい、二回分をまとめて掲載させていただきました。あしからずご了承ください。
暑かった夏もようやく秋のきざしが見えてきたようです。
読書にも旅にも一番良い季節です。充実した秋をお過ごし下さい。

